

トマス・アクィナスのアイデア説 ——人間は神のうちにある観念を知性認識できるか——

米森 慈子

0. はじめに

トマス・アクィナス (S.Thomas Aquinas, 1224/5-1274) はキリスト教哲学における神の観念としてのアイデア説を展開する。それは経験世界の事物に先立って神のうちに事物の原型が認識されていることである。そしてこの神の観念としてのアイデア論は、無からの「創造」というキリスト教の要である原理を支えるものであり、いわば神の意志にかかわることといえる¹。トマスは主著である『神学大全』*Summa theologiae* (S.T.) 及び『真理論』*Quaestiones Disputatae de Veritate (De Ver.)* においても神のうちにアイデアを措定できることを論証している。しかし神のうちにあるアイデアはまさに神の本質であり、最も高貴なあり方をする、絶対的な存在としての神自身という意味での知性である。さて、このような経験世界を超え、無限の存在である神の本質を、また同時に創造主という立場である神を、被造物の我々はそもそも知性認識できるであろうか、有限な被造的知性にとって望める事柄であるのであろうか。

¹アメリカを中心に intelligent design という考えに関する議論が続いている。(ID 論) これはなんらかの知性が世界を造ったと考えるものであり、この場合の知性は創造主である。進化論に対する科学者からの疑問は当初から様々あり、教育現場において進化論のみを教えることも疑問視されている。また intelligent design という考え方は創造説の焼き直しにすぎないという批判や、宗教的ドグマであるという意見もある。ID 論によると世界の被造物を理解することによって創造主を理解することができるが、トマスの創造論においてはあり得ない考え方があり、トマスの体系的な創造論との比較は興味深い。

トマスは『神学大全』第15問題のアイデア説に先立って、第14問題に神の知性認識論を展開し、第15問題のアイデア論の考察後、第19問題に神の意志についての考察をしている。この知性認識することと、意志することとの関連のうちに知性と意志との関係、及び神と人間の類似性や相違点を見出せると思われる。そこから問いへのなんらかの解答を得ることができないのではないか。本稿では知性と意志とのかかわりを、知性と自由意志をもつ存在と、知性をもつもの以外の存在が造られた意味とを考察しながら²、主として『神学大全』第一部第12問題を取りあげ、トマスにおける人間の神認識の知性説を検討することによって神のうちにある観念としてのアイデアを理解することの意味を見出すことを目的とする。

考察内容は1. 人間は神のうちにあるアイデアを理解できるか。2. 神の本質をみるには3. 意志についての3点である。

1. 人間は神のうちにあるアイデアを知性認識できるか

アイデアは神の観念であり、純粹現実態である神の自己認識という理解から、アイデアは神の本質そのものであるといえる。トマスは『神学大全』第一部第1問題で人間知性は、我々の原因であり、事物の依存した存在としての神と、神の唯一性を認識することは可能であるとした上

²自由意志は自由な行為を可能にし、罪の問題を孕んでいることも指摘できる。

で、『神学大全』第一部第12問題において、いかなる仕方で神は我々に認識されるか(Quomodo Deus a nobis cognoscatur)について論及している。トマスの幸福観の立場にたつと、人間の究極の幸福は、人間の最高の働きである知性の働きのあるところに成り立つものである³。これはアリストテレスの幸福観を受け継いだものである。人間固有の働きは知性認識することであり、固有性の究極の在り方をするとところに幸福が設定されているからである⁴。

もし被造の知性には決して神の本質をみるることができないとしたら、人間は決して至福を獲得することができないか、あるいは人間の至福は神以外のものにおいて成り立つことになるか⁵、このようなことはあり得ない。人間の固有性が知性認識することであれば、働きの度合いが高ければ高いほど人間の完成に近づくことになる。このことから、より高貴である可知的な対象を知性認識すればするほど、当人の知性認識はより卓越したものであるといえる⁶。生物としての完成は子が親に似る状態に達するという身体的な類似性であるが、理性的な被造物の究極の完成というものは、存在の根源であるところにあり⁷、いいかえるならば、自らの根源に達する限りにおいて、いかなるものも完成されるということがある⁸。存在に関しても、精神活動に関しても、生まれでた根源に似た形相に

³Cum enim ultima hominis beatitudo in altissima eius operatione consistat, quae est operatio intellectus *S.T. I.q.12.a.1c*

⁴Potest etiam idem manifestari ex ratione speciei humanae. Natura enim uniuscuiusque rei ex eius operatione ostenditur. Propria autem operatio hominis, in quantum est homo, est intelligere: per hanc enim omnia animalia transcendit. Unde et Aristoteles, in libro *Ethic.*, in hac operatione, sicut in propria hominis, ultimam felicitatem constituit. *S.T. I.q.76.a.1c*

⁵si nunquam essentiam Dei videre potest intellectus creatus, vel nunquam beatitudinem obtinebit, vel in alio eius beatitudo consistet quam in Deo. *S.T. I.q.12.a.1c*

⁶Quanto enim quis excellentius intelligibile intelligit, tanto excellentior est eius intelligentia unde...perfectissima operatio intellectus est intellectus bene dispositi ad optimum intelligibile, *De Ver. q.18.a.1c*

⁷In ipso enim est ultima perfectio rationalis creaturae, quod est ei principium essendi *S.T. I.q.12.a.1c*

⁸intantum enim unumquodque perfectum est, in quantum ad suum principium attingit *S.T. I.q.12.a.1c*

なった時に完成するといえる。その根源とは、神である⁹。

またこのことは同時に人間の自然の欲求にかなうものでもある。我々人間には、結果をみることから、その原因を認識しようとする欲求が既に内在しているのである¹⁰。被造物の多様性はアイデアの多様性を意味し、これは神の完全性の多様な具体化といえる。よってその欲求を満たされないものにしておくことのないためにも、知性は第一原因に到達しようとするのである¹¹神の創造において空しいというものがあるということは容認できない。トマスは、神は知性的な能力のつくりてであり、また知性によって見られるものであることは、あきらかであると明言する¹²。

2. 神の本質をみるには

では我々ほどのような仕方で根源に到達すればよいのであろうか。第一原因に到達することは「神をみる」ということである。神をみるという意味は、原因としての神の存在を知る、ということではない。自然の理性によって神の存在を知った上で本質をみるということである。もちろん感覚に依存した視覚によってみることは不可能である。身体の器官に関連する能力である限り、物的なものの範囲を超えることはできないからである。神は非物体であるので、トマスは神をみることができるのは、感覚にも、表象にもよるのではなく、ただ知性によるとする¹³。確かに人間知性は身体器官から自立した、人間にとって高次の在り方をするものであるが、神をみるという役割を果たし得るのであろうか。

⁹Unde oportet quod ultimus terminus humanae perfectionis sit in intelligendo aliquod perfectissimum intelligibile, quod est essentia divina. *De Ver.q.18.a.1c*

¹⁰Inest enim homini naturale desiderium cognoscendi causam, cum intuetur effectum *S.T. I.q.12.a.1c*

¹¹Si igitur intellectus rationalis creaturae pertingere non possit ad primam causam rerum, remanebit inane desiderium naturae. *S.T. I.q.12.a.1c* トマスにおいて第一原因への到達は人間の神との合一を意味するわけではない。神と人間は本性的に同一になりえることはないのである。神の自己認識は神自身と認識内容の合一といえるが、人間が神を知ることはあくまでも他者認識である。

¹²Manifestum est autem quod Deus et est auctor intellectivae virtutis, et ab intellectu videri potest. *S.T. I.q.12.a.2c*

¹³Unde nec sensu nec imaginatione videri potest, sed solo intellectu. *S.T. I.q.12.a.3c*

このことの考察をいわゆる神をみることができるという至福者の存在と我々とを区別するところに求めることができる。というのは結論からすると、至福者でないものの被造の知性は自然本性的には神の本質をみることはできないからである¹⁴。その理由は認識という働きを理解するところにある。認識という作用は、認識対象が認識者にあることに即してなされる¹⁵。つまり認識主体の在り方に認識対象は依存することになる。認識者は本性的に自分以外のものの形相をもつ存在であり、これは認識対象の形象が認識者にあることを意味する¹⁶。もつとも認識者は形象を受け取るのであるから、認識対象を抽象という仕方では受け取る。このことに従うと人間の神認識は、人間知性の在り方に従わざるをえないので、神の本質が認識対象であればそれは人間知性の本性を超えたものとなる。そうすると、神の本質を知りたいという人間の欲求は、結局は満たされることはないということであろうか。

トマスはこの疑問に神の本質をみるための条件を提示し、論及する¹⁷。それは光 (*lumen*)、そして恩寵 (*gratia*) という概念の提示であり、ある意味至福者と我々とを区別する特徴的なものである。

「みる」ということの意味を考えると、トマスはみることにはみる能力と、みられると

ころの事物との視覚の合一の二つが必要であるとする¹⁸。なぜなら前述のようにみられる認識対象はみる認識者のうちにあるのでなければ、みるという現実化は起こらないからである。このことは認識対象が認識者のうちにあるということは、そのものの本質によってあるのではなく、単にそのものの似姿があることであり、このことは明らかなこととして提示されている¹⁹。そしてみる能力と似姿の在り方の関連性が注目される。

トマス哲学の特徴の一つとして、人間知性に高い評価を付し、信頼をおいていることがあげられる。例えば、.....*nomen intellectus sumitur ex hoc quod intima rei cognoscit: est enim intelligere quasi intus legere.*²⁰ といわれているように、知性認識というのはちょうど内側を読んでいくように事物の最も内的なものを認識するということに名前の由来があるという理解である。ところで、すべての本質は神の本質に源をもつのであるから、(*Omnis essential derivatur ab essential divina.* 『対異教徒大全』2.15) 人間の知性は神から得ていることになる²¹。つまり、神の本質は特定の仕方では被造物によって模倣される。被造物はそれぞれ固有の存在をもつが、この在り方は被造物にとって唯一で共通である神の本質の特定の仕方による分有である。

そしてこの神の本質の分有を特徴づける概念に「光」がある。この光とは、自然本性的な能力の意味に理解されたり、自然本性に付け加えられる恩寵や栄光というなんらかの完全性の意味に理解される。知性的被造物の能力は、第一の光から派生するものとして、なんらかの知的な光である²²。しかしながら人間の知性の自然

¹⁴*dicendum quod impossibile est quod aliquis intellectus creatus per sua naturalia essentiam Dei videat. S.T. I.q.12.a.4c* 『真理論』第18問題 (De cognitione Primi Homini In Statu Innocentiae: 無垢の状態における最初の人間の認識について) 第1項 (Utrum homo in statu innocentiae dognoverit Deum per essentiam.) においてアダムやモーセ、パウロなどの特別な人々、及び天使は神の本質をみたのかどうかという議論が展開されている。彼らは確かに我々人間より恩寵によって、また天使であれば自然本性的においてもより神の本質を認識できた。しかし、神以外のものが完全に神をみるということはできない。恩寵の度合いによる程度の問題である。

¹⁵*Cognitio enim contingit secundum quod cognitum est in cognoscente. S.T. I.q.12.a.4c*

¹⁶*sed cognoscens natum est habere formam etiam rei alterius, nam species cogniti est in cognoscente. S.T. I.q.14.a.1c*

¹⁷*Utrum essentia Dei ab intellectu creato per aliquam similitudinem videatur. S.T. I.q.12.a.2: Utrum intellectus creatus ad videndum Dei essentiam aliquo creato lumine indigeat S.T. I.q.12.a.5*

¹⁸*dicendum quod ad visionem, ...duo requiruntur, scilicet virtus visiva, et unio rei visae cum visu: S.T. I.q.12.a.2c*

¹⁹*apparet quod res visa non potest esse in vidente per suam essentiam, sed solum per suam similitudinem S.T. I.q.12.a.2c*

²⁰*De ver.q.1.a.12c*

²¹*considerandum est quod supra animam intellectivam humanam necesse est ponere aliquem superiorem intellectum, a quo anima virtutem intelligendi obtineat S.T. I.q.79.a.4c; ergo dicendum quod illa lux vera illuminat sicut causa universalis, a qua anima humana participat quantum particularem virtutem, S.T. I.q.79.a.4.ad1*

²²*Unde et virtus intellectualis, creaturae lumen quoddam*

的な光は限られており、あるところまでの到達でしかない。我々に与えられている自然的な光によって認識されるのは自然本性的に知られる共通の原理だからである²³。

確かに、知性的な被造物の能力はある可知的な光であり、これは根源の光、つまり根源の知性である神に基づくものであり、人間の知性の能力は神の知性を分有された似姿であった²⁴。しかし、みられるもの、つまりみるものとの合一が必要であるものの側である神の本質は、いかなる被造物の似姿によってもみられることはできない²⁵。トマスは物体の形象では非物体の事物の本質は認識できないという例を用いて²⁶、被造的な形象の限界性に言及した上で、神をみるのに必要な栄光の光 (*lumen gloriae*) を知性の強化によって必要としなければならないとする²⁷。知性の強化とは神の本質を知性が可知的な形相として受け入れることができるようになることであり、知性を高みに引き上げること、別の表現をするならば知性を照明することといえる²⁸。つまり神をみるのは、人間知性の自然本

intelligibile dicuntur, quasi a prima luce derivatum: sive hoc intelligatur de virtute naturali, sive de aliqua perfectione superaddita gratiae vel gloriae. S.T. I.q.12.a.2c。トマスは第一部第84問題の魂と知性認識論においても、我々の知性認識には永遠の理念である神の内なるイデアが関わっており、そして人間の知性の光は神の知性の光の分有である (*Ipsum enim lumen intellectuale quod est in nobis nihil est aliud quam quaedam participata similitudo luminis increati, in quo continentur rationes aeternae. S.T. I.q.84.a.5c*) 事実、神の光は我々に刻印されていると主張し (*ibid.*)、知性認識することと光との関連を興味深く論究している。

²³*ergo dicendum quod per lumen naturale nobis inditum statim cognoscuntur quaedam principia communia quae sunt naturaliter nota. S.T. II-II. q.8.a.2.ad1*

²⁴*relinquitur quod sit aliqua participata similitudo ipsius, qui est primus intellectus. Unde et virtus intellectualis, creaturae lumen quoddam intelligibile dicitur, quasi a prima luce derivatum: S.T. I.q.12.a.2c*

²⁵*Sed ex parte visae rei, quam necesse est aliquo modo uniri videnti, per nullam similitudinem creatam Dei essentia videri potest. S.T. I.q.12.a.2c*

²⁶*sicut per speciem corporis non potest cognosci essentia rei incorporeae. S.T. I.q.12.a.2c*

²⁷*Dicendum ergo quod ad videndum Dei essentiam requiritur aliqua similitudo ex parte visivae potentiae, scilicet lumen gloriae, confortans intellectum ad videndum Deum: S.T. I.q.12.a.2c*

²⁸*Cum autem aliquis intellectus creatus videt Deum per essentiam, ipsa essentia Dei fit forma intelligibilis intellectus.; oportet quod ex divina gratia superaccrescat ei virtus*

的な光ではなく、栄光の光を得ることが必要となってくるのである。

ではこの栄光の光とはどのようなものであろうか。それは超自然的な態勢づけのもとにあるものであり、神の恩寵に基づくところのものといえる。恩寵とは何らかの超自然的な存在へと魂を高める何らかの完全性であり、ただ神からのみあたえられるものである²⁹。神の本質を受け入れることができるということは人間のうちに自然本性を超えるものの存在を前提とする。例えば、空気に火がつくことは空気が火の形相を受け入れる何らかの態勢づけがなされることによって火の形相を受け取る状態になるようにならなければならないのと同じように、人間が自らの自然本性以上の何らかの態勢づけによって、神の本質を受け取る状態を用意しなければならない³⁰。その時に必要であるのが光である。

しかし、光によって神の本質をみることができるという理解ではない。神の本質はもとより可知的であるからである³¹。光は確かに媒介性をもつのであるが、光において神をみることができるという意味での媒介性ではなく、光のもとにおいて、という意味での媒介性であり、知性の完成が光の作用の目的である³²。

intelligendi. Et hoc augmentum virtutis intellectivae illuminationem intellectus vocamus; S.T. I.q.12.a.5c

²⁹*Donum autem gratiae excedit omnem facultatem naturae creatae. S.T. I-II. q.112.a.1c*

³⁰*dicendum quod omne quod elevatur ad aliquid quod excedit suam naturam, oportet quod disponatur aliqua dispositione quae sit supra suam naturam: sicut, si aer debeat accipere formam ignis, oportet quod disponatur aliqua dispositione ad talem formam. S.T. I.q.12.a.5c*

³¹*dicendum quod lumen creatum est necessarium ad videndum Dei essentiam, non quod per hoc lumen Dei essentia intelligibilis fiat, quae secundum se intelligibilis est: S.T. I.q.12.a.5c,ad1,2*

³²*sed quasi perfectio quaedam intellectus, confortans ipsum ad videndum Deum. Et ideo potest dici quod non est medium in quo Deus videatur: sed sub quo videtur. S.T. I.q.12.a.5c,ad 1,2. また光とは例えば、それは色とともにみられるものであると説明されているように (et lumen, quod est ratio videndi colorem et simul cum ipso videtur. S.T. I-II. q.57.a.2.ad 2), 光の概念は手段的な意味合いとうけとめられる (Colores facti visibiles actu per lucem pro certo imprimunt suam similitudinem in diaphano; 光によって現実態として見えるようになった色は確かに透明体において類似のものを刻印し、そしてその結果として視力において*

恩寵の内容をより具体化するなら、それは知性認識するという、悟りの恩寵である。知性認識とは親密さという意味合いを含んでおり、内面を読んでいくことであるので³³ 知性認識できる栄光の光が強ければ強いほど、より神の内奥へ入っていくことができる。人間の知性は光の恩寵によって神に似たものの度合いが強くなるといえる。ただし、完成ということから推測できるように、この知性の完成を成就させる恩寵は人間の自然の知性を破壊して、人間知性が全く別のものにつくりかえられるというものではない。人間の自然の知性の光は、恩寵による栄光の光が注がれることによって認識できることがらと対立することはなく、恩寵の光は自然の知性の光を完成させるのである³⁴。

では、人間が栄光の光という恩寵、つまり、神の本性を受け取る状態を用意するにはどのようにすればよいのであろうか。トマスは恩寵は特定の人だけに与えられるのではなく、神への愛を持つ人であれば、だれでもが恩寵に與ることができるのであるとする³⁵。愛とは欲求に属するものであり³⁶、欲求が善に向かっている適

性、もしくは均衡性自身であって、善への好感に他ならない³⁷。神への愛があるところに神の本質に近づくことができ、神も神を求めるものの中に存在することができるといえる。そこに神と求めるものとの相互の愛がなりたつのである³⁸。愛は愛を原因として育まれる³⁹。愛をより多くもてば、より完全に神をみるということがあるのであり、このことからより至福者になり得るといえる⁴⁰。我々は神に対して正しく秩序づけられるよう、徳によって恩寵を得るに値するようにならなければならない。

3. 意志の問題

1) 神の意志

創造という行為は神の意志に基づいてなされる。神は知性そのものであり、知性の存在は意志の存在を伴う⁴¹。意志とは知性的な欲求能力であるからである。神は自らのみならず、他のものも意志する⁴²。

このことの説明としてトマスは自然の事物の自然本性的な傾向性から行う。それは自然の事物は、自らの善に関し、善の不足の場合は得ることを求め、善を所有する場合にはその状態を保ち、そのみならず、固有の善を可能な限り他にもたらそうとするという傾向性があるからである⁴³。自然の事物がこのようであるなら、む

も刻印する。『対異教徒大全』2.76)。しかし、光は光があればそれのみでわかるというものではなく、光とともに、もしくは、光のもとにあるという理解である。

³³dicendum quod nomen intellectus quantum intimam cognitionem importat: dicitur enim intelligere quasi intus legere. S.T. II-II. q.8.a.1c

³⁴さらにトマスは『神学大全』の第二部の2において神をみる、つまり神の直視に二種類あることを説明する。神の本質を直視できるという完全な直視は、成就された悟りの賜物を天において見出せる。そして現世に生きるわれわれの不完全な直視というものは、神はなんでないかをみるのであり、われわれの知性で把握されるあらゆるものを神は超越するものであるということを確認すればするほど、それだけ一層神を認識するとする (Similiter etiam duplex est Dei visio. Una quidem perfecta, per quam videtur Dei essentia. Alia vero imperfecta, per quam, esti non videamus de Deo quid est, videmus tamen quid non est: et tanto in hac vita Deum perfectius cognoscimus quanto magis intelligimus eum excedere quidquid intellectu comprehenditur. Et utraque Dei visio pertinet ad donum intellectus: prima quidem ad donum intellectus consummatum, secundum quod erit in patria; secunda vero ad donum intellectus inchoatum, secundum quod habetur in via. S.T. II-II. q.8.a.7c)。

³⁵Quicumque autem habet gratiam habet caritatem. S.T. II-II. q.47.a.15c

³⁶amor ad appetitivam potentiam pertinet S.T. II-I. q.27.a.1c

³⁷Ipsa autem aptitudo sive proportio appetitus ad bonum est amor, qui nihil aliud est quam complacentia boni; S.T. I-II. q.25.a.2c

³⁸dicendum quod iste effectus mutuae inhaesionis potest intelligi et quantum ad vim apprehensivam, et quantum ad vim appetitivam. S.T. I-II. q.28.a.2; Finis autem spiritualis vitae est ut homo uniatur Deo, quod fit per caritatem: S.T. II-II. q.44.a.1c

³⁹Unde manifestum est quod omne agens, quodcumque sit, agit quamcumque actionem ex aliquo amore. S.T. II-I. q.28.a.6c

⁴⁰Unde qui plus habebit de caritate, perfectius Deum videbit, et beatior erit. S.T. I.q.12.a.6c

⁴¹dicendum in Deo voluntatem esse, sicut et in eo est intellectus: voluntas enim intellectum consequitur. S.T. I q.19.a.1c; Et sic oportet in Deo esse voluntatem, cum sit in eo intellectus. Et sicut suum intelligere est suum esse, ita suum velle. S.T. I.q.19.a.1c

⁴²dicendum quod Deus non solum se vult, sed etiam alia a se. S.T. I. q.19.a.2c

⁴³Res enim naturalis non solum habet naturalem inclinationem respectu proprii boni, ut acquirat ipsum cum non habet, vel ut quiescat in illo cum habet; sed etiam ut proprium bonum in alia diffundat, secundum quod possibile est. S.T. I

ろん神も他の存在を望むということになる。

トマスは、太陽がその存在の本質性のゆえに諸事物を照明するのと同様に、神も存在の本質性によって存在するすべてのものに善性をそそぐというディオニシウスの言をしばしば引き合いにだすように⁴⁴、神はあふれる善を他者におよぼす創造という行為を行うのである。すべて存在するものは善であるという考え方からすると⁴⁵ 神は善そのものであり、その神は自らの善を他に類似性として伝達しようとする⁴⁶。ゆえにあらゆるものの完全性は神から発出しているから、存在するものは類似性としてではあるが、その存在の完全性をもつことになるといえる⁴⁷。

そして、神自身の場合には自己は目的であり、他のものは神の目的に向けられたものとしてその存在の善性が保証される⁴⁸。このようにトマスは神の意志が事物の原因であり、神は自らの意志によって働くものであることを明言している⁴⁹。そして「存在」ということを高く評価するトマスの考えを創造論から読み取ることができる。このように知性に光を与える恩寵も神の善性の分有であり、神の自由意志にもとづくも

q.19.a.2c

⁴⁴Dicit enim Dionysius, cap.4 De div.nom.: sicut noster sol, non ratiocinans aut praeeligens, sed per ipsum esse illuminat omnia participare lumen ipsius valentia; ita et bonum divinum per ipsam essentiam omnibus existentibus immittit bonitatis suae radios. S.T. I. q.19.a.4

⁴⁵dicendum quod omne ens, in quantum est ens, est bonum. S.T. I q.5.a.3c

⁴⁶Unde et hoc pertinet ad rationem voluntatis, ut bonum quod quis habet, aliis communicet, secundum quod possibile est. S.T. I. q.19.a.1c

⁴⁷第一原因はその卓越した善性にもとづいて、他の諸事物に、単に存在だけでなくその原因としての存在も与えているのである (dum prima causa ex eminentia bonitatis suae rebus aliis confert non solum quod sint, sed etiam quod causae sint. De Ver.q.11.a.1)。能動者はその作用において、自らの類似性を結果とするのであるし、結果のうちには能動者の形相の類似性が生じているのである (Cum enim omne agens agat sibi simile in quantum est agens, agit autem unumquodque secundum suam formam, necesse est quod in effectu sit similitudo formae agentis. S.T. I. q.4.a.3c)。

⁴⁸Sic igitur vult et se esse, et alia. Sed se ut finem, alia vero ut ad finem, in quantum condecet divinam bonitatem etiam alia ipsam participare. S.T. I.q.19.a.2c

⁴⁹dicendum quod necesse est dicere voluntatem Dei esse causam rerum S.T. I. q.19.a.4c; Cum igitur voluntas Dei sit universalis causa omnium rerum, S.T. I. q.19.a.6c

のとなる。恩寵を与えるか否かはひとえに神の意志によるものであり、人間は望むということしかできない。

2) 人間の意志

人間も知性と自由な意志をもつ存在である。意志とは神の本質をみるための恩寵に備えるか否かは人間の意志の自由である。知性が原因となって意志が存在し、その意志が人間に自由をもたらず。知性が原因である以上、意志に諸々の情念がかかわってくるにしても、情念に従うか否かを選択することは自由意志に委ねられている⁵⁰。

人間が神の本質をみるという究極目的を意志するのは、自然本性的な傾向性を考慮をした上でも、知性の秩序づけに他ならないといえる。そもそも人間の知性は自己自身に帰還するという仕方でも働くものであり、至福への意志の働きは自己自身への内省となり、次第に自覚されていくものといえる。その後、至福への傾向性は自発的で意志的なものとなり、至福への意志が知性をその目的への手段を模索するよう働きかける。そして知性は思量することを経た結果として、必要な善を認識する。意志はその善を選び取る対象として、選択するという行為において自由を行使する⁵¹。

選択という行為は知性による自由な判断と欲求能力である意志の選択がかかわるものである。トマスにとって意志と自由は、自由は意志を根拠として働くという意味で同一の働きである。神の本質をみるという究極目的への意志の正しさをのぞむためには、正しい欲求をもつことが要求されるのであり、知性は両者の合致を導くといえる。究極目的は全体としてよく生きることという一つの究極の目的をめざして様々な活動はある段階に従って秩序づけられている

⁵⁰Sed voluntas non ex necessitate sequitur inclinationem appetitus inferioris: licet enim passiones quae sunt in irascibili et concupiscibili, habeant quantum vim ad inclinandum voluntatem; tamen in potestate voluntatis remanet sequipassiones, vel eas refutare. S.T. I. q.115.a.4c

⁵¹dicendum quod proprium liberi arbitrii est electio: S.T. I.q.83.a.3c 自由意志に固有なものが選択するということである (sicut etiam executio iusti operis est effectus rationis rectae S.T. II-II.q.54.a.2.ad2)。正しい行為の実行は正しい理性の結果である。

といえる⁵²。

4. 結語

神のアイデア、つまり神の本質をみようとする人間を創造したのは神である。創造は神の意志の行為であるので、人間が神を知性認識することは人間知性の中に神を取り込むことであり、人間が神より優位になってしまう。このことはむしろ否定されるべきことなので、神は知性認識を超えたものになければならないが、それは知性認識できないということではなく、知性認識の可能性は残されている。人間知性にとって固有の真理といえる知性の光は神的真理の類似であり、分有であることからして、知性とは神の本質へ向かうことを望めるものである。トマスにとって知性とは自然本性においても十分な価値が認められるのであり、人間知性を信頼した。また人間は知性を駆使することによって真に人間的責任ある者になる。トマスは人間を意志的な判断を下していく、経験的世界に生きる存在としても知性の役割を評価している。

一方、人間は神の恩寵に頼らざるを得ない存在として、栄光の光を神を愛するという仕方でも求めた。トマスのキリスト教哲学において恩寵の概念は一つの要である。恩寵は神の聖なる愛のかたちであり、聖慮であり、神の形相である。その恩寵が人間に与えられることによって人間本性の質料の部分は限定されていくので、罪から回復されるということになっていく。そこには恩寵を得るに値する知性や、意志に基づいた善なる行いが必要になってくる。

われわれ人間は真なる神の認識であるアイデアを愛に基いた意志によって見出そうと努力しなければならないであろう。神の本質、アイデアを知るという人間の究極目標は結局は人間の本性を超えたものである。自らの力だけでは正しい欲求に合致する真理を得ることはできない。そこで対神徳である信仰や希望、そして愛によって第一真理である神へと人間の知性を完成させていこうとしなければならないのである。その至福者をめざす生に恩寵は与えられるのである

⁵²dicendum quod ad unum finem ultimum, quod est bene vivere totum, ordinantur diversi actus secundum quendam gradum: S.T. II-II.q.51.a.2.ad2

う。トマス哲学には知性を有し、自由な意思決定に基づいて主体的に行動できるという、そして神に向かって自由な人格として生の全体を秩序づけていくという人間が「神のかたどり」といわれる意味を再認識できる要素が見出せる。

結論としては、人間は神に似たものを知るといしかたでしか神のアイデアを知ることにはできないのであり、本質をみることはできない。しかし神と人間の間には類似性があるのであり、恩寵に対して開かれている人間は、人間としての完成をのぞむことができるのである。人間は神の有する無限のアイデアのうちの有限性を付与された存在でしかないが、愛することと知ることが一体となって働きながら、神に近づく可能性が大きく開かれた存在でもある。ここに神の有するアイデアの知性認識をめざす意味があると思われる。

使用テキスト

Thomas Aquinas, *Summa theologiae*, cura et studio Sac. Petri Caramello cum textu ex recensione Leonina, Marietti, Italy, 1952.

Thomas Aquinas, *Quaestiones disputatae de veritate*, cura et studio P.Fr. Raymundi Spiazzi, O. P. Marietti, 1949.(ed.X,1964.)

Thomas Aquinas, *Liber de veritate catholicae fidei contra errores infidelium seu 《Summa contra gentiles》*, Marietti, Romae. 1961.

主要参考文献

Thomas Aquinas, *The Summa Theologica*, Translated by Fathers of the English Dominican Province, Revised by Daniel J.Sullivan, vols. I,II, 1952.

高田三郎他訳、トマス・アキナス『神学大全』、創文社、1960f.

Thomas Aquinas, *Quaestiones disputatae de veritate*, ed.Leonina 22, Roma, 1970-1974.

Thomas Aquinas, *Truth*, Translated from the definitive Leonine text by Robert W.Mulligan, S.J. HENRY REGNER COMPANY, 1952

高田三郎訳、アリストテレス『ニコマコス倫理学』岩波書店、1997.

水田英実『トマス・アキナスの知性論』創文社、1998.

稲垣良典『人間の知的遺産 20 トマス・アキナス』講談社、1979.

K・リーゼンフーバー『中世における自由と超越』創文社、1988.

長町裕司「トマス・アキナスと今日における神

学的理性」,『カトリック研究 68号』,上智大学神学会,1999.

桑原直己「自然本性の自己超越」,『哲学・思想論叢第28号』筑波大学,2002.

Thomas Aquinas, *Commentary on the Book of Causes*, Translated and annotated by Vincent A.Guagliardo,O.P., Charles R.Hess,O.P., Richard C.Taylor, The Catholic University of America Press Washington, D.C., 1996.

Defferrari, R. J. *A Latin-English Dictionary of St.Thomas Aquinas*, Washington, D.C., 1960.

(よねもりよしこ, 広島大学大学院
文学研究科博士課程前期 [哲学])